教職課程担当教員養成プログラム外部評価

―教職 P 共同研究成果報告会に参加して―

藤村　晃成（大分大学）

2022 年 3 月 3 日に開催された教職 P 共同研究成果報告会では、「大学における教員養成と教育委員会による教師塾」に関する共同研究の成果報告とディスカッションが行われた。予定時刻を大幅に超えるほど白熱した議論が展開され、非常に刺激的な時間となった。コメンテーター、そしてプログラム修了生の立場で報告会に参加して、教職 P における共同研究のプロジェクトが受講生の成長に寄与する有意義なものだと実感することができた。

とくに印象的だったのは、共同研究における問題設定の着眼点が教職 P プログラムと密接に結びついていたことである。今回の共同研究で対象としているのは「教師塾」であるが、単なる教員養成の方法の 1 つとして教師塾の実態を明らかにすることだけに目的が置かれていない。教師塾における動向について「大学と教育委員会との接近を所与のものとして無批判に受け入れて教員養成の原則を無自覚に掘り崩している」（報告資料 2 頁）可能性を捉え、批判的な視点から問題設定が行われていた。ディスカッションでも、大学での教員養成の原則・意義をどのように考えるのか、大学の教職課程における「教育学」の位置づけと教師塾の取り組みがどのように関連するのか、といった点に焦点が当てられていた。教員養成をめぐる政策の非学問化・規格化が進行する近年の動向の中にあるからこそ、教員養成に対する批判的考察を行い学術的価値のある研究成果として発信することが教職 P プログラムの共同研究では重要だと思われる。

教師塾が目指す教師像の特徴を大学における教員養成との関係から浮き彫りにしようとする本研究の試みは、教師教育者を担う受講生が「どのような教師をいかに育てたいのか」という授業理念・哲学を深めることにもつながるだろう。実際、報告会のディスカッションの中で、「共同研究が終わった後もずっと考えなければいけない問題だと思う」という発言が見られ、教職授業プラクティカムでの経験を想起しながら教師塾の存在意義を捉えようとしている受講生も多かった。共同研究の取り組みが教職 P の他のプログラムと連動し、研究者／教師教育者としての在り方の問い直しや省察のプロセスが生まれていたことがうかがえた。

また、異なる専攻分野の受講生が協働して共同研究を進めていくことの意義も見出すことができた。今回の報告では、各都道府県・市区町村の教育委員会が主宰する教師塾の 48 事例という膨大なデータが分析対象だったが、複数で役割分担することで概要整理と事例分析を円滑に行うことができたようである。事例分析についても、専攻分野の違いを生かした多角的な視点に基づく分析が可能になっていた。また、ディスカッション中に投げかけた 1 つの質問に対して受講生全員が各自の視点から回答を行っている姿からは、共同研究をめぐる充実した議論が普段から行われていることがうかがえた。研究室・学年を超えた対話の機会や横のつながりが形成される教職 P における共同研究のメリットが色濃く反映されていたといえよう。

今回の報告は、教師塾の全国的な動向の把握と代表的な事例分析を行う基礎調査としての位置づけだったと思う。今回明らかになった知見と今後の研究結果がどのように結びついていくのかに関心を持った。（大学における教員養成もそうであるように）教師塾において理念と実態のジレンマや意図せざる帰結が様々な背景によって生じていることが考えられる。それらは、教師塾の運営者や連携する自治体関係者、受講している学生・卒業生などといった当事者に対するフィールドワーク・インタビュー調査によるインテンシブな分析から描き出されるかもしれない。報告会でも上記の点を含めた今後の研究の見通しが述べられていたため、今後の研究の進展を大いに期待したい。

最後に、自分自身のキャリアにおいても今回の報告会での研究交流が重要だったことを改めて強調しておきたい。教職 P プログラムを修了してから 3 年、専門学校や教職大学院に身を置きながら、教育と研究のつながりや教師教育者としての在り方について常に課題に直面し葛藤の日々を過ごしている。今回の報告会への参加は、教員養成をめぐる葛藤を「言語化する機会」がなかったことが何よりの悩みだったことに気づき、自分自身の教員養成に対するスタンスや考え方を更新するための重要な機会となった（参加に際して「教職教育ポートフォリオ」を久々に読み返し当時掲げていた授業理念を振り返ることもできた）。可能であれば、今後も教職 P 修了生のネットワークを生かし、現プログラム受講生と修了生との交流が「共同研究」を媒介としながら行われていくと良いのではないだろうか。このような機会を今回設けていただいたことに、心より感謝を申し上げたい。